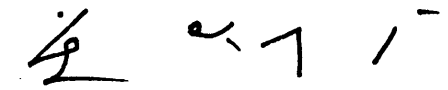
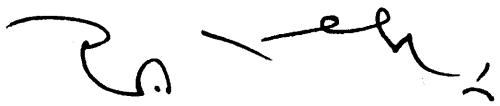
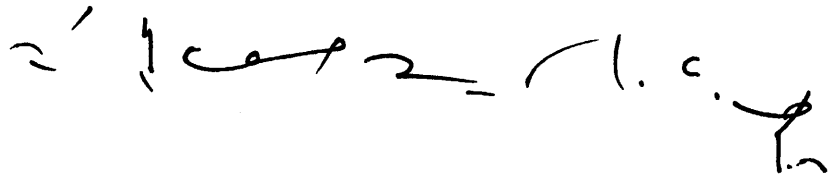
第152回・17年5月・1級



まず初めに、敬語についてお話をします。

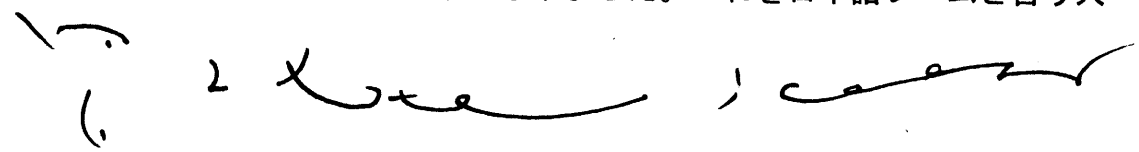


数年前、美しい日本語を紹介するという本が話題になったことがあります。

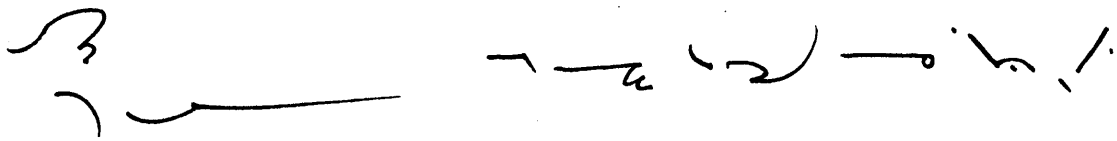


それ以来、日本語への関心は随分高まってきたようでありまして、言葉をテー

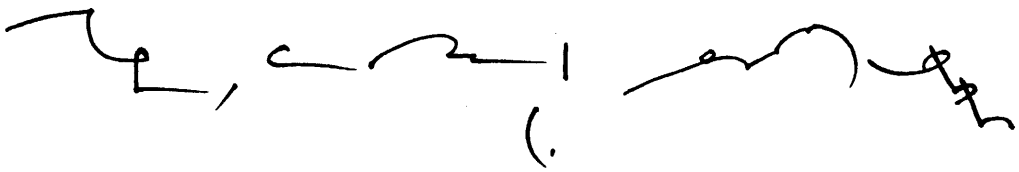
マにした本がよく出版されるようになりました。これを日本語ブームと言う人



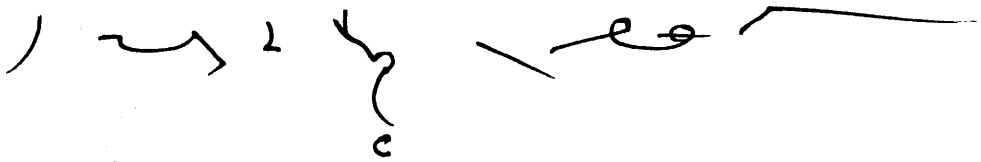
もいるくらいなのであります。昨年からは、文章の書き方でありますとか正し



い言葉遣いをわかりやすく解説した本がベストセラーになっているようであり



ます。そして、その中でもよく売れている本は、敬語に関するものであります。

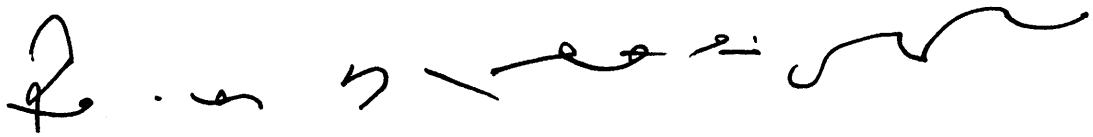


敬語は、人間関係を円滑にするために便利なものであります。ところが、そ

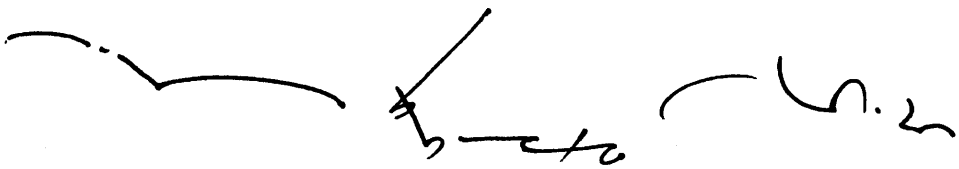
の使い方につきましては、どうも自信がないという人が多いのであります。特

に最近は、とにかく丁寧に話そうと意識する余り間違った使い方をしている人

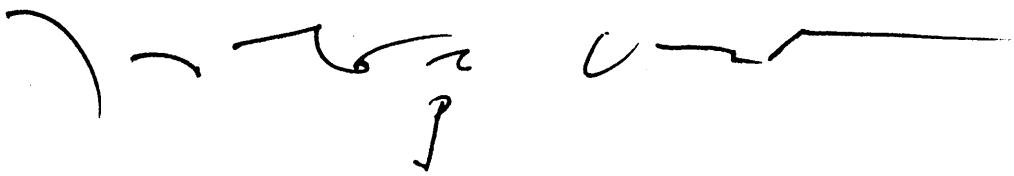
が目立つように感じます。私も、敬語に関する知識があやふやなままでありま



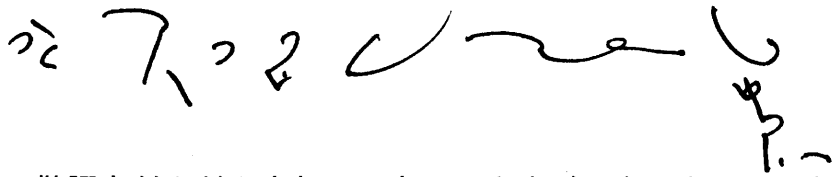
して、どう言っていいかわからないという場面がよくあります。



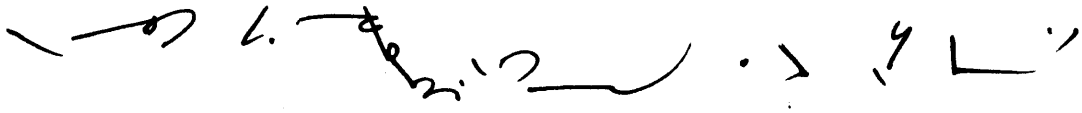
それからまた、言葉というものは時代とともに変化するものであります。以



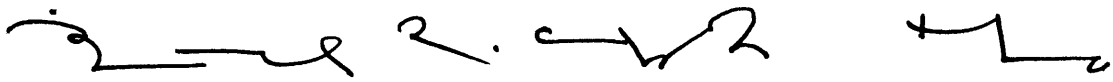
前は間違いとされていた表現がいつの間にか一般的になっていることがありま



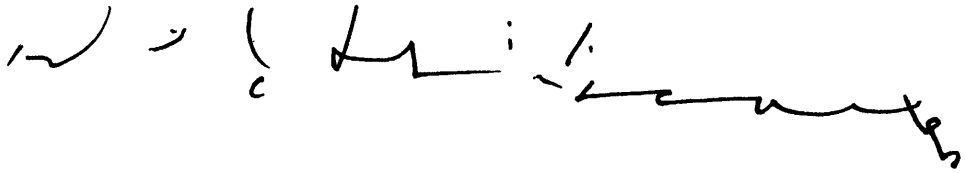
す。敬語もだんだん変わってきていますが、専門家の間でも、新しい使い方を



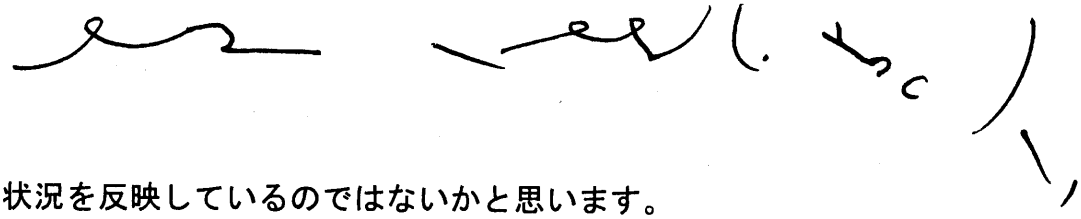
認めるかどうかについて、意見が分かれているものもあります。このようなこ



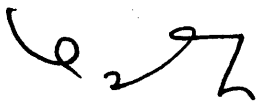
とから、多くの人が、本当はどのような使い方が正しいのかわからなくなって



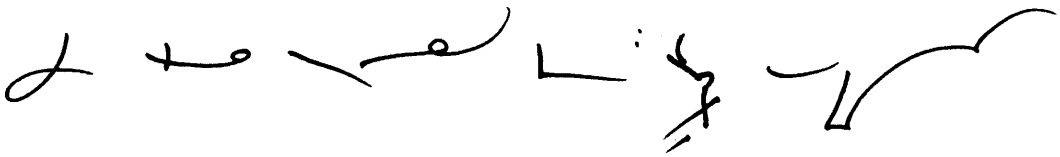
きているのではないでしょうか。敬語についての本が売れているのは、そうい



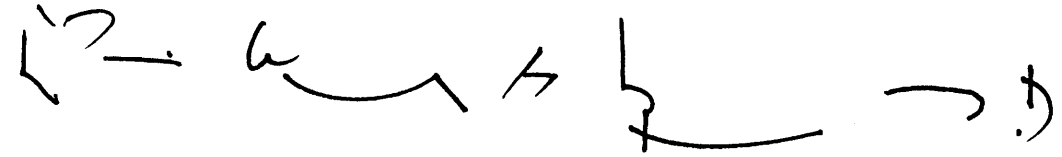
う状況を反映しているのではないかと思います。



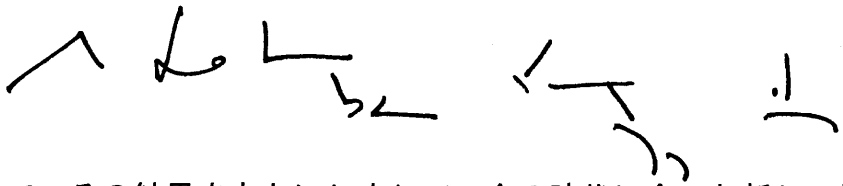
そこで、このように敬語の使い方が揺れている実態を何とかしようというこ



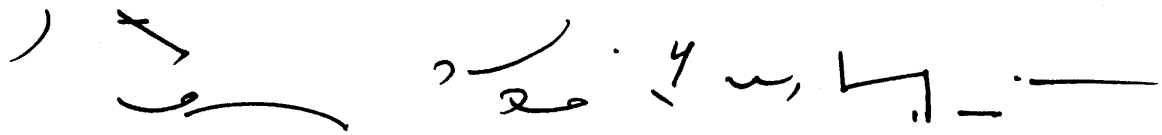
とで、専門家が中心になりまして対策を立てることになりました。まず、実際



に社会でどのように使われているのか、一年かけて調べることにしました。そ

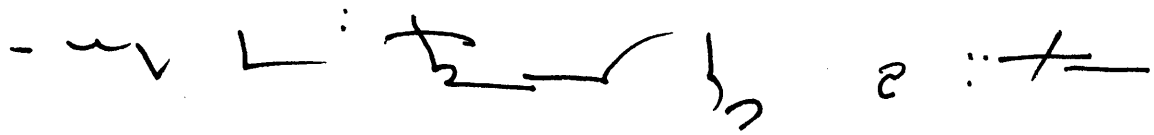


して、その結果をもとにしまして、今の時代に合った新しい指針をつくること



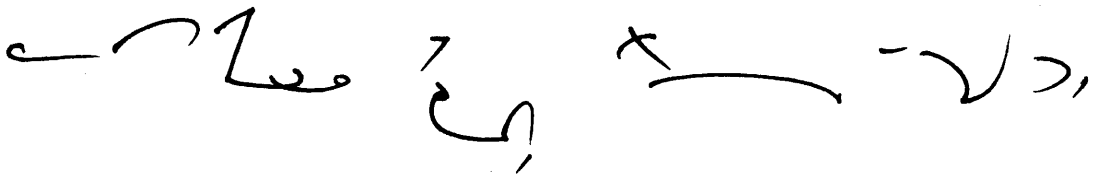
に決めたのであります。

その指針では、使い方が間違っているかどうかということよりも、違和感が

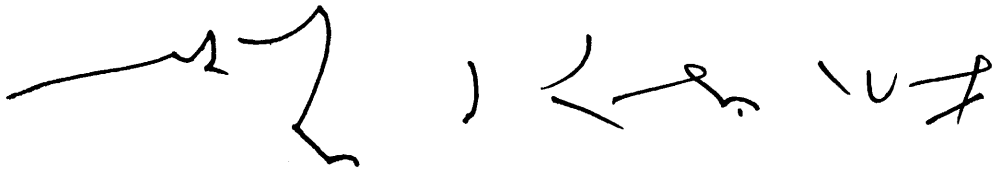


あるかないかということを判断の根拠にしたいということであります。また、

わかりやすいものとなるように、具体的な場面を設定しまして、それらの例を

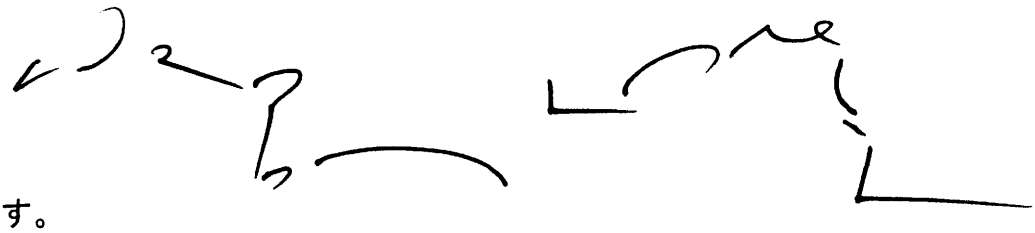


公表するのだそうであります。さらに、尊敬語でありますとか丁寧語といった



名前についても、必要があれば変えるということであります。検討に当たりま

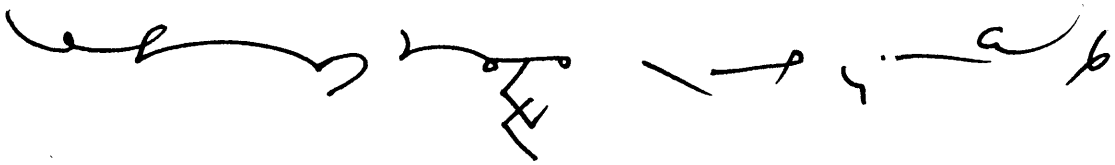
しては、国民の意見も取り入れまして、使いやすいものにしてほしいと思うの



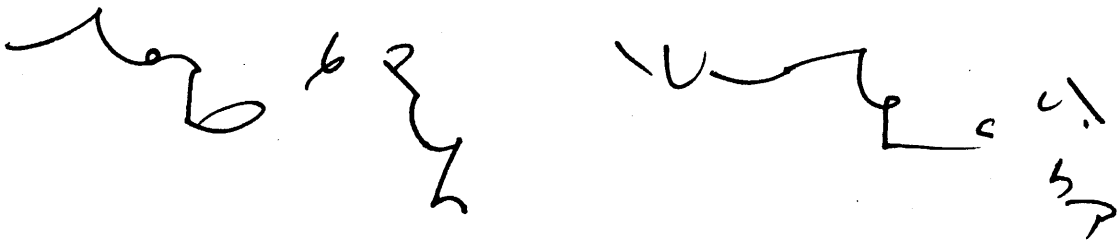
であります。

このような指針を出すのは、実に半世紀ぶりになります。これからは、教育

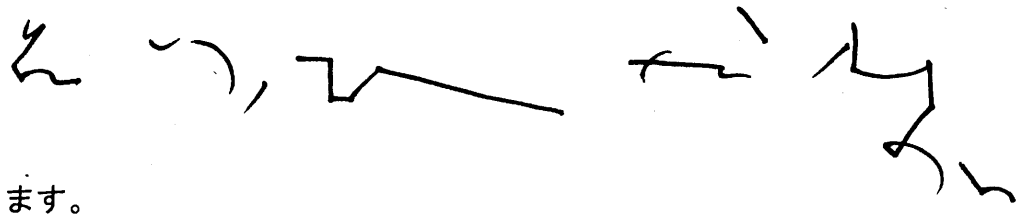
の場におきましても、読み書きだけではなくて、敬語を含めた会話の力を伸ば



すことにも力を入れてほしいと思います。丁寧な言葉遣いは、相手に好印象を

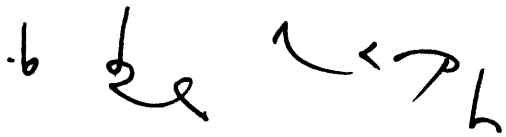


与えますし、信頼を築くものでありまして、生活する上で大切なことだからで

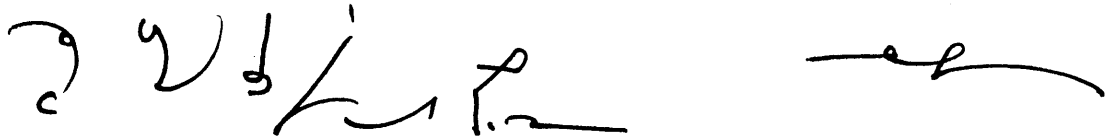


あります。

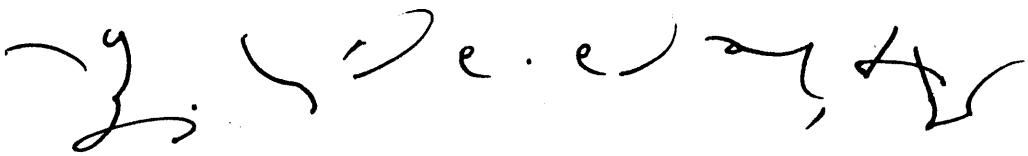
次に、読書についてお話をしてみたいと思います。



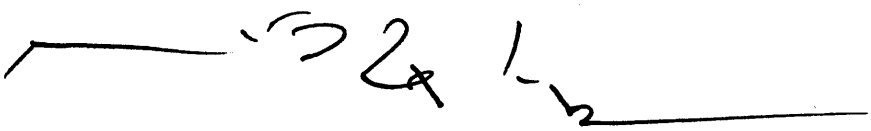
皆さんは朝の読書運動というのを聞いたことがありますか。学校におきまし



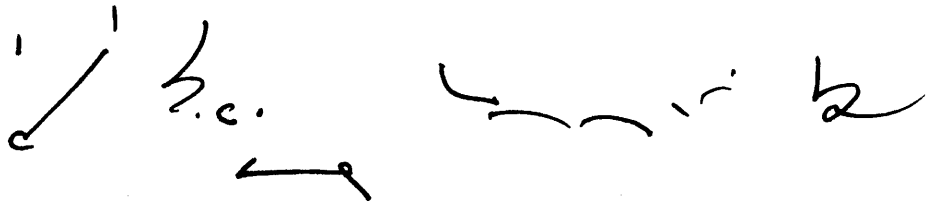
て、毎朝、授業が始まる前の十分間、自分の好きな本を黙って読むというもの



であります。先生も一緒になって取り組んでいるのであります。

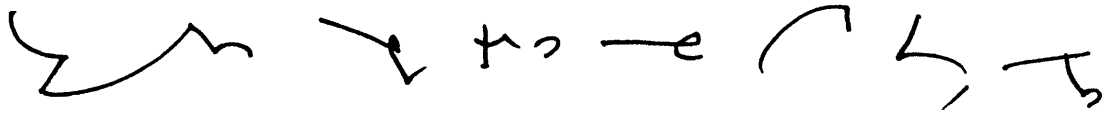


この運動は、そもそもはある高等学校で始まりました。先生が、子供たちの

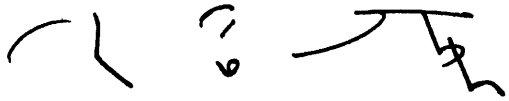


心が荒れているのを心配して、落ちついて一日のスタートを切るための対策と

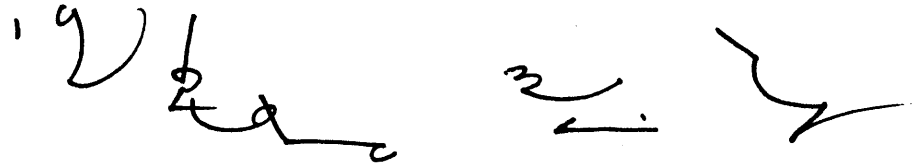
して始めたそうであります。現在では実施している学校は約一万を超えている



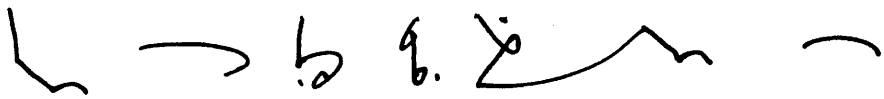
ということで、全国的に広がっているようであります。



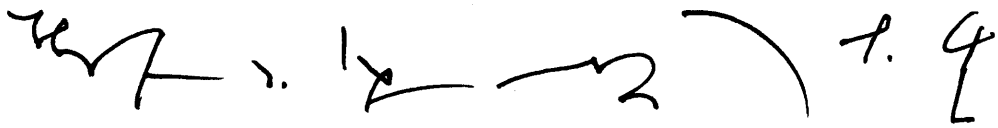
この朝の読書をするようになってから、いろいろな効果が出始めたというこ



とであります。まず、子供たちに落ちつきが出てきたそうであります。また、



集中力や読解力がついてきたという声もあります。それから、遅刻が減ったと

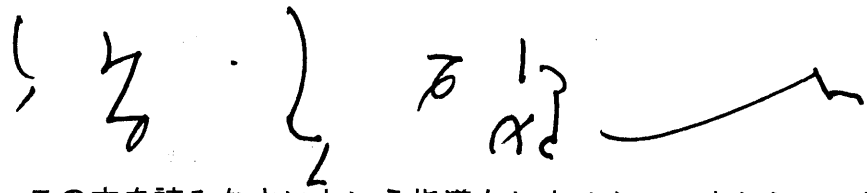


か不登校やいじめがなくなったという報告もあります。そして、本を通じまし

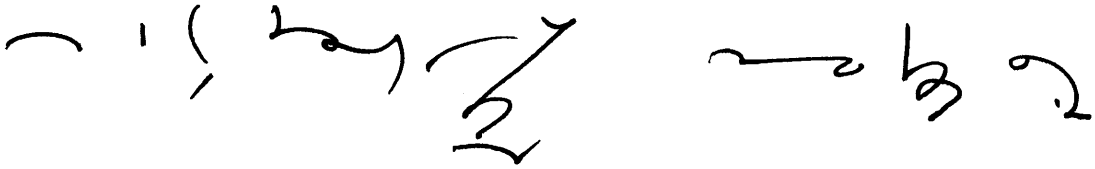
て友達や家族との会話がふえたということで、みんなの表情が生き生きと明る

くなってきたそうであります。

本を読むときには、感想文とか記録をつけることは求めないそうであります。



また、この本を読みなさいという指導もしません。ですから、子供たちも、気



楽に読書に取り組むことができるのだと思います。わずかな時間でも、毎日続

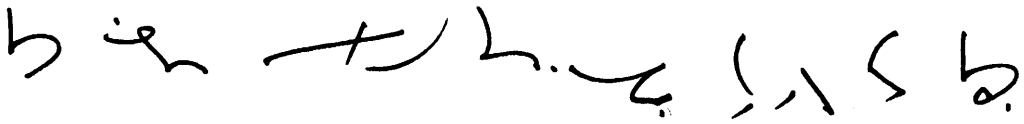
けることで自然に読書が好きになり、豊かな心がはぐくまれていくのではない

でしょうか。

もちろん、すぐにこのような効果が出るわけではありません。しかし、必ず

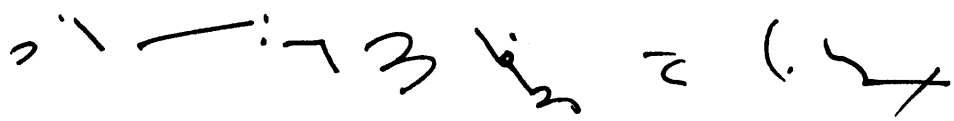
効果は出てくるそうであります。そのためには、読書の環境を整備するという

ことも大事であります。校内のさまざまなところに本を置いて、いつでも子供

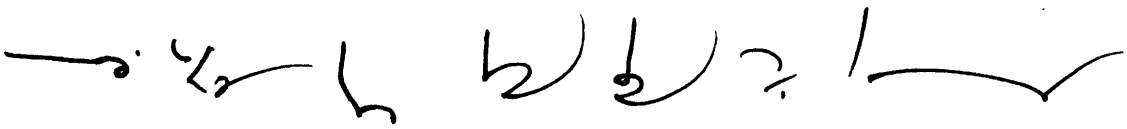


たちが手にとれるようにしている学校もあるそうであります。

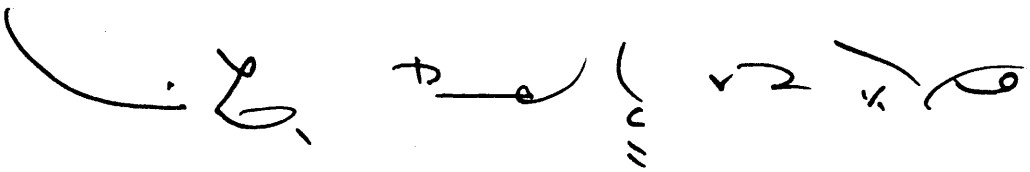
一方で、ここに来て問題も出てきています。それは、本が古かったり数が不



足しているということであります。子供の読書の推進に取り組もうという法律



ができたにもかかわらず、小中学校の本は年々減少する傾向にあるというふう



に聞いています。やはり、このような取り組みを支えていくには学校だけでは

限界がありますから、地域などにも協力を求めて十分な量を確保していく必要

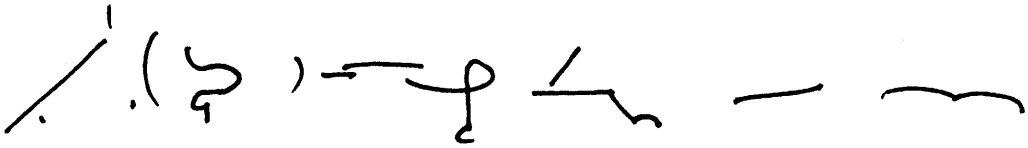
があると思うのであります。

本来、子供たちは本が大好きです。楽しい本に出会いさえすれば夢中になって読むのであります。最近は、テレビやゲームに接する時間の方が多くなり、

活字離れが懸念されています。しかし、それは大人が子供たちに本に親しむ時

間を与えてこなかったのが原因ではないかと思います。そういう意味で、この

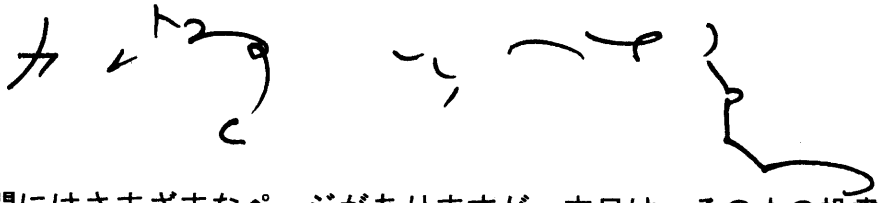
運動が本に触れ合うよいきっかけになることは確かであります。今後、ますま



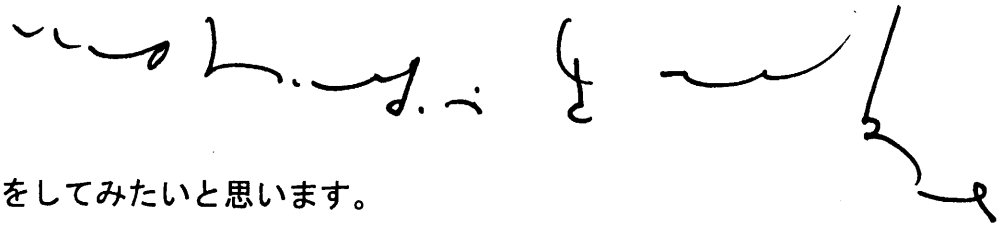
す広がっていけばいいと思っています。

それでは、最後のお話に入ります。

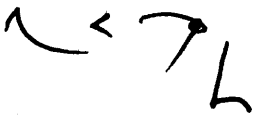
速記を勉強している皆さんは、新聞を毎日読んでいることでありましょう。



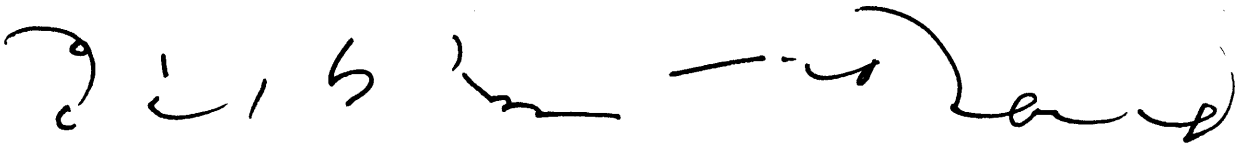
新聞にはさまざまなページがありますが、本日は、その中の投書欄についてお



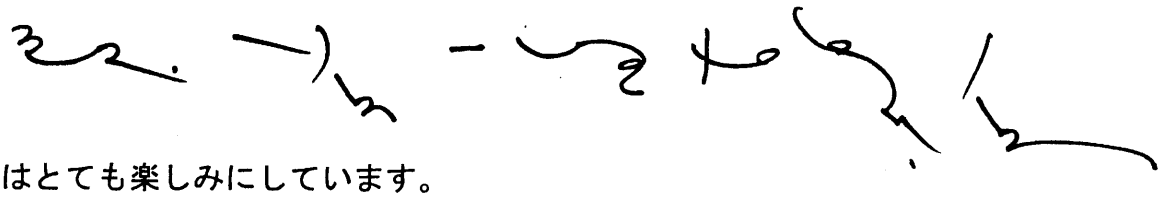
話をしてみたいと思います。



皆さんはこのコーナーをいつも読んでいますか。ここには老若男女のいろい



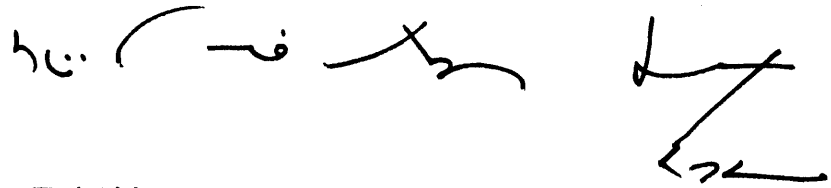
ろな意見が掲載されています。その中身は実にバラエティーに富んでいまして、



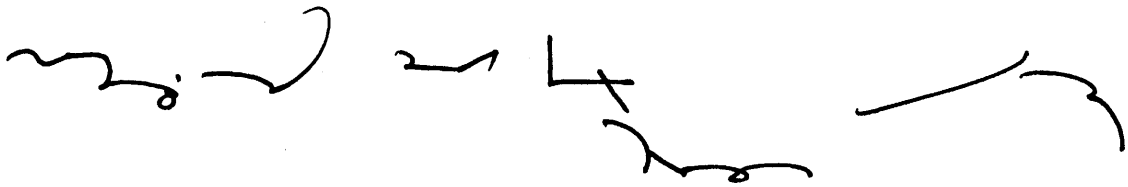
私はとても楽しみにしています。

ところで、ある雑誌を見ていましたら、新聞の投書欄について研究している

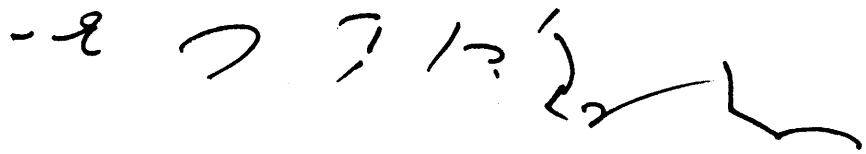
グループがあるという記事が載っていました。どのような活動をしているのか、



少し興味がありましたので、インターネットを使って調べてみました。そうし



ましたら、その人たちは、いわゆる全国紙を対象に調査をしているということ



でありました。その内容は、各社の投書欄を比較して、それぞれの新聞社の特

徴を探し出すというものであります。彼らがつくった報告書を読んでみますと、

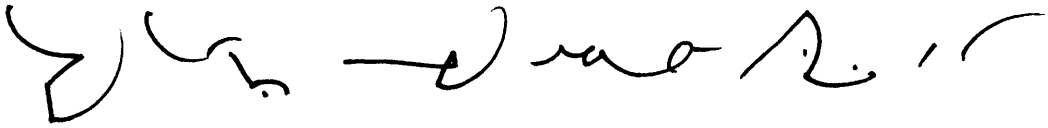
おおむね次のようなことが書かれていました。どの新聞社におきましても、ある問題についての賛成意見も反対意見も載せるけれども、全体の傾向としましては、その新聞社の意見に似たものが多くなっているということであります。

具体的な例を一つ挙げてみたいと思います。

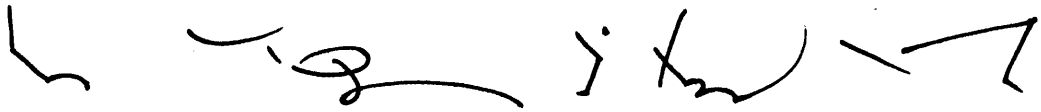
毎年、八月になりますと戦争に関する投書がたくさん載ります。これについての特集が組まれることもよくあります。このようなときに特にはっきりした

傾向が見られるというのであります。例えば、ある新聞では、日本が戦争を始

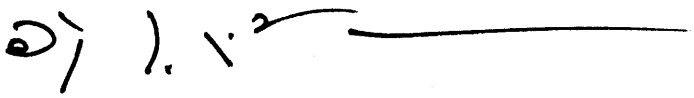
めたことの反省でありますとか、外国の被害者に対する謝罪などが多いという



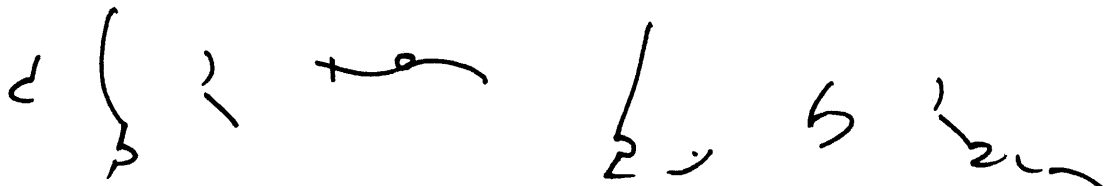
ことであります。何年にもわたりましてデータをとっていますので、傾向とし



て歴然と差が出ていたというのであります。



私は、報告書を読んでこのように思いました。投書をする人がいつも読んで



いる新聞から受ける影響というのは大きいでしょう。ですから、その新聞と同

じような意見が集まるのもある意味では当然のことだと思います。しかし、そ

れぞれの新聞社がそういうものを中心に選んで載せている可能性もあると思っ

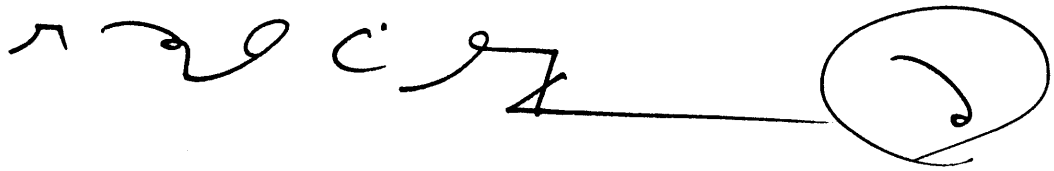
たのであります。つまり、投書欄にも新聞社の主張があるのではないかという

ことであります。

この報告書を読んでからは、一つ一つの投書を読むときにも、この意見が載

るということは何か意味があるのかもしれないというふうに考えるようになり

ました。そういう見方をしますと、投書欄にはまた別の楽しみ方もあるような

気がします。これからは、いつも読んでいるものとは違う新聞の投書も見て、

比較してみるのもおもしろいのではないかと思ったのであります。（了）